
❖ REC Community College ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター提携講座

聖地をめぐる―山と信仰―

2019 年 1 月 10 日（水）、17 日（水）、24 日（水）、2 月 7 日（水）、2 月 14 日（水）

10：45～12：15

龍谷大学深草学舎 紫光館



講義の様子

（龍谷大学深草学舎 紫光館）

❖ 講 義 の 概 要 ❖

2019 年 1 月 10 日（水）から 2 月 14 日（水）にかけて、龍谷大学世界仏教文化研究センター提携講座「聖地をめぐる―山と信仰―」が、龍谷大学深草学舎紫光館で開催された（受講生：40 名）。

日本では多くの山が「聖地」とされている。今回は、山を中心に「聖地」における神仏について講義を行った。日本における山の神仏は、どのようなプロセスを経て形

成され、またどのような特徴を持っているのか。講義では、白山や立山、比叡山等を取り上げた。

講座は、全5回の講義から構成され、第1回の講義を金澤豊（本学文学部実践真宗学研究科実習助手）、第2回講義を唐澤太輔（本センター博士研究員）、第3回講義を李曼寧（本センターリサーチ・アシスタント）、第4回を亀山隆彦（本センターリサーチ・アシスタント）、第5回を大澤絢子（本センター博士研究員）が担当した。各講義の内容は、以下の通りである。

第1回：「仏教徒にとっての山—須弥山からカイルス山まで—」

講 師：金澤豊（龍谷大学文学部実践真宗学研究科実習助手）

「聖地をめぐって—山と信仰—」スタートにあたり、聖地概念の発生と、聖地としての山のあり方について概説した。古来よりインドでは人間の認識を超えた宇宙の中心に須弥山を配し、のちの仏教の世界観に大きな影響を与えたことを紹介。『俱舍論』世間品の紹介）その影響下にある現代チベットにおけるカイルス山への五体投地による巡礼と、複数の聖なる山を紹介し、登頂を目的とせず山を右邊する巡礼にどのような意味があるのか、先行研究を基に解説を加えた。さらに、釈尊が靈鷲山で法を説いたように、仏教徒は山そのものに畏敬の念と力を見つつ、布教の場として利用してきたことを資料に基づき説明した。人間中心的なものの見方から聖地が発生したのと同様、山もまた踏破する対象としてみなす私たちの習慣があることに注意し、仏教徒にとっての山は時代地域によって変化しながらも日本仏教では「擬死と再生の場所」として理解されていることを紹介した。

第2回：「白山比咩と菊理媛」

講 師：唐澤太輔（龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員）

講義では、まず白山と白山比咩神社の成り立ち（歴史的経緯）について解説を行った。そして、講師が実際にフィールドワークを行った白山七社の内のいくつかを写真を交えて紹介した。次に、白山比咩と同義とされる菊理媛の謎について、『日本書紀』を中心に考察し、この女神が果たした役割と意味、つまり、菊理媛は「仲を取り持つ神」であり、また「あの世とこの世とを行き来できるシャーマン」であったという仮説を述べた。また、日本において山の神が大抵「女神」であることに注目し、現代に通ずる習俗及び「マタギ」たちによる信仰についても紹介した。さらに、「聖地」とされる山において「女人禁制」が多い理由について、仏教・神道・道教などの視点から考察した。最後に、柳田國男によって広く知られるところとなった、白山神社と被差別部落の関係（経緯と伝播）について考察を行った。

第 3 回：「比叡山における神仏習合—外国から来た神々—」

講 師：李曼寧（龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント）

本講義は、比叡山における神仏習合信仰をめぐって、特に外国から来た「赤山明神」と「新羅明神」を取り上げ、美術・説話の伝承事情を踏まえ、それらの由来と展開を紹介した。

この二神は、もともと同じ神であり、中国山東省赤山浦周辺で信仰された「赤山神」であった。特に当地居住者の守護神や海上安全の神としての性格が強く、唐代の赤山浦周辺に滞在した新羅人によって朝鮮半島まで広がり、「新羅神」と呼ばれるようになった。そして、円仁・円珍が入唐求法の時、この神を前後して異なる名で日本へ勧請した。さらに、その後の山門派・寺門派の分裂によって、赤山明神が説話の中で、三井寺（園城寺）の戒壇設立に反対する山王権現の眷属として登場し、三井寺を守護する新羅明神に対立するような立場になった。

この神の勧請、そして一神から二神、さらに対立する二神への変化は、すべて、比叡山・天台宗の歴史と緊密な関係にあり、日中・日韓の仏教交流の証しでもあった。

第 4 回：「立山信仰とその表現」

講 師： 亀山隆彦（龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント）

立山信仰を描いた宗教絵画である「立山曼荼羅」には、いくつか系統があり、それぞれ様式や内容が異なる。本講義では、聖地研究における三つのアプローチの中でも「構築主義的アプローチ」を採用して、同立山曼荼羅を検討し、様式・内容の異なりが持つ意味について考察した。

立山曼荼羅には、大きく分けて二つの系統がある。一つは、立山信仰の要素を詳しく描く芦峯寺系の立山曼荼羅、もう一つは、比較的簡素な岩峯寺系の立山曼荼羅である。講義では、これら立山曼荼羅の相違が、立山信仰における両寺の位置に由来すること、また、その位置が変化すると、合わせて曼荼羅の構成も微妙に変化する点を明らかにし、聖地表現における社会の重要性を指摘した。

第 5 回：「宗祖たちと聖地・本山」

講 師： 大澤絢子（龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員）

本講義では、近世の仏教統制を背景とした宗派意識および本山の聖地化との観点により、日本仏教の宗祖と寺院の聖地化を考察した。

高野山や比叡山など、山を仏道修行の場とした僧侶たちは、次第に宗祖として集団

の信仰を本山へ集中させる役割を担うようになっていく。特に近世では、幕府による仏教統制を背景に各宗派のアイデンティティを主張する風潮が高まっていき、教学の研鑽、宗祖の伝記の著述、由緒の作成が盛んになされた。同時に、門信徒においては、本山や宗祖ゆかりの土地への巡礼が盛んになり、それらは神聖な場として特別視され、人々が参詣することでその周辺へ街が形成されていった。人々の巡礼が繰り返されることで聖地は孤独な山から賑やかな街へと変容していく。信仰とそうでない行為の境界が曖昧になりつつも、そこには確かにその空間を特別な場と捉える視点があり、こうした動きからは、社会と仏教の関わりと社会のなかの仏教のあり方を見出すことができる。

❖ ま と め ❖

本講座は、「聖地をめぐる一説話・密教・夢一」（2016 年前期）、「聖地をめぐる一聖なる場所とその記憶一」（2017 年度前期）、及び「宗教と旅―遊行・巡礼・観光―」（2017 年度後期）の後継講座である。担当した 5 名の講師は、2017 年度 4 月から始動した仏教文化研究所研究プロジェクト「仏教と聖地に関する総合的研究―聖なる表象とは何か―」（代表：楠淳澄教授）にも所属している。講師の何名かは、講義前に各々が主題とする聖地でフィールドワークを行い、その成果を、本講義にも反映させた。

各講義内容や当日の講義の様子は、講師間で共有し、次の担当講師へうまく引き継ぐよう努めた。全 5 回を通じて、受講生は毎回非常に熱心に講義を聴講し、欠席はほぼなかった。講師は、事前に綿密な準備を行い、また詳細なレジュメやパワーポイントなどを用い、受講生に対して非常に密度の濃い内容の講義を提供することができたと思われる。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員、リサーチ・アシスタント一同
龍谷大学文学部実践真宗学研究科実習助手 金澤豊